



京大広報

No. 621

2007. 3



湯川秀樹・朝永振一郎生誕百年記念式典・記念講演会を開催
—関連記事 本文2326ページ—

目次

大学事務組織の活性化を目指して

総務・人事・広報担当理事・副学長

木谷雅人……2324

〈大学の動き〉

湯川秀樹・朝永振一郎生誕百年記念式典・記念講演会を開催……2326

病児保育室を開室……2326

稲盛財団から建物寄附……2327

〈部局の動き〉

医学研究科とフランス国立医学研究機構がINSERM京大ユニット開設促進にむけて合意……2328

〈日誌〉……2328

〈寸言〉

学びの山道を照らすもの—自由人の教育を求めて
山下太郎……2329

〈随想〉

今の日本人は「遣らずぶったくり」?

名誉教授 土岐憲三……2330

〈洛書〉

「評価」と陰徳

川端祐司……2331

〈話題〉

経営協議会委員宇治キャンパスを視察……2332

女子高生・車座フォーラム2007を開催……2332

第10回リカレント教育講座『心の教育』を考える—子どもの育ちと身体—を開催……2333

きさらぎコンサートを開催……2333

〈訃報〉……2334

〈お知らせ〉

原子炉実験所一般公開……2336

〈隔地施設紹介〉

理学研究科附属木曾生物学研究所……2337

京都大学広報センター

<http://www.kyoto-u.ac.jp/>

大学事務組織の活性化を目指して

総務・人事・広報担当理事・副学長 木谷 雅人

はじめに

総務・人事・広報の担当理事として平成17年10月に着任してから早くも1年半を経過しようとしています。未曾有の変革期にあって多くの課題が山積する中で大学の発展に少しでも貢献したいと考えながら仕事をしてきたつもりですが、まだまだ途半ばという感を強くしています。私の目指す基本的な方向を端的に表してみますと、まず総務・人事担当としては「チャレンジ精神に満ちた生き生きとした職場づくり」,「大学のために何をすべきかを主体的・創造的に考え、自ら目標を設定・実行していく人づくり」であり、事務改革及び人事制度改革はそのためにこそあると考えています。また広報担当としては「大学からの積極的広報活動による大学に対する理解と支援のネットワークづくり」であり、広報活動を社会連携や同窓会も含めて幅広くとらえ、各方面に窓を開き働きかけながら戦略的に展開していこうとするものです。紙幅の関係上、以下には事務改革及び人事制度改革に関するこれまでの取り組みを紹介しつつ、今後の課題を述べることにします。

1 事務改革

事務改革については、昨年4月に、各種の事務センターの設置、グループ化・フラット化などを含む大きな組織再編を行い、京大広報の号外(平成18年4月)を発行してその趣旨の周知を図りました。私は、その際に寄せたメッセージで、次の思いを強調して述べました。まず、事務改革というと事務の簡素化、合理化、効率化という面のみでとらえられがちですが、その究極の目的は、各職員が大学全体やそれぞれの組織のミッションを自覚し、自ら主体的・創造的に目標を立てて実行していく風土を確立する

ことにあります。したがって、組織再編は出発点であり、これからの改革の実質化が正念場であること、すなわち大学の全ての部門の職員がいわば経営や企画のマインドを持って現場からの改革に取り組んでいく雰囲気を作り出し定着させていくことが重要であると指摘しました。

その後の状況を見ると、私自身もベテランから若手までできるだけ多くの職員と率直に話をするよう心がけているつもりですが、おかげさまで改革の意識が全体として着実に高まってきていることを嬉しく思っています。ただ一方で、そうした改革の意識が個人や小グループのレベルにとどまっていたり、なかなか具体的な行動を伴う改革にまでつなげていれないという嫌いもあるように感じられます。もちろん日々の仕事の忙しさに追われているという事情もありますが、いわゆるタテ・ヨコの情報共有や意見交換などの風通しをもっと良くすれば、よりスピーディに無駄なく改革が進むのではないかと思うこともしばしばです。これまでも本部と部局、本部の各部間などの意思疎通の重要性は強調してきたところですが、今後、これまで以上にそうした機会を増やしていく必要があります。それもいわゆる会議ではなく、実際の課題に対応して部や部局の枠を越えたプロジェクト・チーム方式での仕事の進め方を導入したり、幅広い職員による自主的な勉強会などの自己啓発活動を支援したりするなどの取り組みを積極的に行っていきたくと考えています。

新年度の組織再編については別途説明する機会があると考えていますが、基本的にはこれまでの改革の方向に沿いつつ、京都大学の本来のミッションである教育・研究・社会貢献を支える基盤となる組織



を一層強化することがねらいです。そして、事務改革については、たんに事務改革担当が取り組むというのではなく、各部や部局間の連携を通じて改革の実質化を図る活動をより強力に進めていきたいと考えています。

2 人事制度改革

人事制度改革においては、昨年来、目標管理の試行的導入、勤務評定制度の見直し、人事異動基本方針の明確化、多様な要請に応じた外部人材の登用を可能にする柔軟な雇用形態の導入、豊富な知識・経験を生かす高齢者再雇用制度の導入などを進めてきました。

このように様々な仕組みの導入は進んでいますが、その趣旨が学内で十分に理解され実際に生かされているかという点、まだまだ疑問があります。

昨年4月のメッセージでは、事務改革と人事制度改革を「車の両輪」と表現しましたが、改革の実質化を図るためにはむしろ一体としてとらえて推進していく必要があります。とりわけ各レベルの職員による自覚的な目標の設定・管理を上司・部下間のコミュニケーションを図りつつ促していく目標管理の考え方は、事務改革の目的そのものにつながるものです。また、新しい勤務評定制度は、たんに評定結果を出すというのではなく、目標管理とも関連させながら、被評定者本人へのフィードバックを含む評定の過程を通じて個々の職員の意識改革や資質・能力の向上を図るといったねらいがあります。

今後、私自身も、これらの人事制度改革の趣旨について、事務改革を含め大学の全体方針の中に位置づけながら分かりやすく説明していくよう努力するとともに、学内でこれらの改革を実際にうまく活用している例を紹介し共有できるようにしていきたいと考えています。

人事に関しては、制度改革とともに、大学を取り巻く環境の変化の中で、これからの大学職員に必要

な資質・能力や専門性を向上させるための研修、より広く言えば人材開発が極めて重要になっています。今年はじめにグループ長に対する討議・演習形式の宿泊研修を実施するという新たな試みを行いました。今後とも主体的な参画を前提とする実践的な研修の充実を図っていく必要があると思います。さらにはそれらの研修や人材開発の方針を体系化して職員に分かりやすく示すことが喫緊の課題と考えており、早急に検討したいと考えています。

おわりに

京都大学に着任して以来、個性や創造性を尊重する「自由の学風」、現場やフィールドを重視しながら新たな領域を開拓する「探検大学」などの伝統に改めて魅力を感じています。一方で、日本のみならず世界的な大学を取り巻く社会環境や学生の変化の中でこうした伝統の真の強みを保持し続けるためには、変えるべき部分、変えない部分を見極めつつ、常に進化を目指す意識的な努力が不可欠であることを痛感しており、アドミニストレーターとしての私の立場で何をすべきか、何ができるかを考えることが大切だと思っています。

今年の新人職員募集パンフレット用のインタビューで、京大が求める職員像を聞かれ、私は能力や専門性に加えて「京大を愛しその発展に貢献しようという情熱を持った人」「世界人類に貢献するという高い視野で将来の京大のあるべき姿を考えられる人」と答えました。もちろん、このことは新人だけでなくすべての職員に当てはまることです。

新人からベテランまでの職員が、職場で、また仲間同士で、京大の将来を考えた熱い議論を戦わせる、そうした雰囲気や事務組織や教員という枠を越えてぜひ生まれるようにと願っています。

大学の動き

湯川秀樹・朝永振一郎生誕百年記念式典・記念講演会を開催

昭和24(1949)年に日本人で初めてノーベル賞を受賞した湯川秀樹博士と、本学理学部物理学科の同級生で同40(1965)年に同じくノーベル賞を受賞した朝永振一郎博士の生誕百年を記念して、湯川博士の生誕百年にあたる1月23日(火)、時計台記念館百周年記念ホールにおいて、「湯川秀樹・朝永振一郎生誕百年記念式典・記念講演会」が開催された。

記念講演会では、野依良治理化学研究所理事長(平成13(2001)年ノーベル化学賞)の「湯川先生に憧れて」と題した講演に始まり、Frank Wilczek マサチューセッツ工科大学物理学教授(平成16(2004)年ノーベル物理学賞)、松浦晃一郎国際連合教育科学文化機関(UNESCO)事務局長が記念講演を行った。学内外からの370名あまりの参加者が熱心に講演に聞き入り、会場から質問が出るなど、盛会のうちに終了した。

また、引き続き行われた記念式典では、尾池和夫総長から「今後とも京大から第二、第三の湯川・朝永が次々と育ち、世界の学問をリードする、エネル

ギーの満ちた大学であり続けることを祈願したい」との式辞が述べられた後、結城章夫文部科学事務次官が「湯川・朝永両博士のような独創的で幅広い視野を持った人材の育成を大学に期待する」との祝辞を述べられ、続いて、浅島 誠日本学術会議副会長、麻生 純京都府副知事、上原 任京都市副市長が祝辞を述べられた。

(総務部)



記念式典で式辞を述べる尾池総長

病児保育室を開室

2月5日(月)医学部附属病院内に「京都大学女性研究者支援センター病児保育室」を開室した。開室にあたり、尾池和夫総長、松本 紘研究担当理事・副学長をはじめ関係者参列のもと病児保育室開室式典を開催した。

病児保育室では、子どもが病中・病後のために幼稚園・保育園・学校へ登園・登校できない時でも、親が研究や仕事を休むことなく、安心して保育を委ねられる環境を提供するため、常駐する保育士と看護師が連携して病児の保育を行う。



尾池総長ほか関係者と病児保育室スタッフ

病児保育室の利用について

対象者：原則として女性の京都大学教職員及び学生の子どものみで、病中・病後の子ども(感染症を除く)。

男性の教職員・学生の子どものみは、定員に空きがある場合に利用できます。

対象年齢：生後6ヶ月～小学校3年生

定 員：5名

開室時間：平日8：15～19：00

料 金：1時間500円／人(昼食・おやつ代を含む)

利用方法：事前登録制(無料)

予約制(TEL：751-3090)

詳しくは、女性研究者支援センターのホームページをご参照ください。

http://www.cwr.kyoto-u.ac.jp/byoji/byoji_top.html



病児保育室の室内
(女性研究者支援センター)

稲盛財団から建物寄附

本学と財団法人稲盛財団(稲盛和夫理事長)は、本学が我が国を代表する学問の府として、地域社会はもとより国際社会に対して21世紀の更なる学術・文化の発展に貢献していくことを共通の理念として、稲盛財団が「稲盛財団記念館」を建設し本学に寄附することについて合意し、2月14日(水)時計台記念館迎賓室(旧総長室)において覚書の調印式を行った。

「稲盛財団記念館」は、川端近衛南東角に建設予定で、1階部分には京都賞に関する情報を内外に広く紹介するための「京都賞ライブラリー(仮称)」を併設し、大学院アジア・アフリカ地域研究研究科、東南アジア研究所、地域研究統合情報センター、こころの未来研究センター(仮称)の研究室および会議室等が入居する予定である。

調印式では、本学と稲盛財団の関係者が見守るなか、尾池和夫総長、稲盛和夫理事長が覚書に署名を行い固い握手が交わされた。

本学と稲盛財団の両者は、この「稲盛財団記念館」が教育研究や国際交流および地域交流を推進する中



調印式で一堂に会した本学と稲盛財団関係者

核拠点として、社会に広く開かれた大学の象徴となるものと期待している。

1. 場 所 吉田キャンパス川端近衛南東角
2. 構造・階数 鉄筋コンクリート造・地上3階
3. 床面積 約6,000平方メートル
4. 完成予定 平成20年夏
5. 寄附時期 完成後速やかに



稲盛財団記念館完成予想図(鴨川方向から)

(施設・環境部)

部局の動き

医学研究科とフランス国立医学研究機構が INSERM 京大ユニット開設促進にむけて合意

2月8日(木)パリ市のフランス学士院で、本学医学研究科附属ゲノム医学センターに新たに設置が決まったフランス国立医学研究機構 (INSERM) 京大ユニット (U. 852) の開設促進に向け、INSERM 長官クリスチャン・プレシヨール博士と成宮 周医学研究科長の間で覚書が交わされた。新設される研究ユニットは、日仏研究協力による「人種間比較による複合遺伝性疾患の遺伝因子の同定」を目的とし、ゲノム医学における国際協力の重要性を強く認識したプレシヨール長官自らが先頭に立って計画が推進された。プロジェクトは本年から8年間、INSERMによる研究費、研究スタッフなどの支援を受けて進められる。これに関連して、国際会議「ゲノム科学とその周辺分野における日仏国際協力」が、2月8日(木)、9日(金)の両日に亘って開かれ、今後のゲノ



署名する成宮研究科長(手前)とINSERMプレシヨール長官(奥)

ム科学分野での日本とフランスの様々な共同研究の可能性が議論された。今回、本学に開設されるINSERM京大ユニットは、フランス国外のものとしては世界で4番目となり大きな注目を集めている。

(大学院医学研究科)

日誌 2007.1.1 ~ 1.31

- | | |
|---|---------------------------------|
| 1月4日 新年名刺交換会 | 22日 役員会 |
| ♪ 仕事始め 総長挨拶 | 23日 博士学位授与式 |
| 9日 役員会 | ♪ 湯川・朝永生誕百年記念式典・記念講演会 |
| 12日 企画委員会 | 24日 総長ランチミーティング(霊長類研究所) |
| ♪ 学生部委員会 | 29日 広報委員会 |
| ♪ 連合王国, Eric Thomas ブリストル大学
学長 他2名, 総長他と懇談 | ♪ 役員会 |
| 15日 役員会 | 30日 教育研究評議会 |
| 16日 部局長会議 | 31日 施設整備委員会 |
| 17日 国際交流委員会 | ♪ 大学入試センター試験実施委員会 |
| 20日 平成19年度大学入試センター試験
(21日まで) | ♪ 「京都大学環境報告書2006」発行記念シン
ポジウム |

寸言

学びの山道を照らすもの
—自由人の教育を求めて

山下 太郎

私は、京大文学部で助手として4年間、京都工芸繊維大学では講師、助教授として8年間、よき恩師とよき同僚に恵まれて、充実した研究生生活を過ごすことができた(専門は西洋古典文学)。過去形で書いたのにはわけがあって、じつは4年前、家業を継ぐために大学の研究職から幼稚園の世界に飛び込んだのである。

この世界、なかなか面白い。こちらの接し方一つで、子どもたちはぐんぐん成長し変化する。たとえば「歩く」という切り口。当園は北白川山の上であり、200段近い石段を歩いて登るしかアクセス方法はない。雨の日も雪の日も、園児らは毎朝5つの集合場所(半径1キロ四方)から、先生に引率されて元気に山道を登ってくる。歩くことから一日の活動が始まるのである。小さい積み重ねでも、3年間に見られる心身の成長はじつに大きい。歩く中で会話もはずむし、年下の子を優しく守ることも学ぶ。

子どもはまた、「本物」に敏感である。これも創立以来の伝統で、当園では園長が年長児に俳句を教えることになっている。全員が正座し、黙想することから俳句の時間は始まる。芭蕉や蕪村、一茶の俳句をただ繰り返し暗唱する。一句、一句、自分の耳を頼りに暗記しなければ、何も始まらない。新しい俳句を紹介するときの子どもたちの顔は真剣そのものである。俳句のリズムに慣れるにつれ、今度は自作の俳句を作ることに喜びを見出す。知識として学校教育の先取りをさせるのではない。子どもたちの知的好奇心を満たし、真摯に学ぶ姿勢を教える上で俳句は有効なのである。

さて、私は園長就任とともに、学校法人の一部門として、小学生以上を対象とした「山の学校」を立ち上げた。知を愛する心(ピロソピア)を分かち合い、人間的教養(フーマニタス)を重んじる学びの場を創設したい、この一心からであった。例えば、小、中、高生は、国語の教科書代わりにプラトーンやアリス



トテレースの作品を読み、講師と議論を交わす。大人向けには、キケローやウェルギリウスのラテン語を読み解くクラスもある。言うなれば、真の意味でのリベラル・アーツを復活させたいのである。ラテン語のクラスについて言えば、片道3時間かけて通う社会人もいるし、今までしっかり文法を学べなかったことが心残りだったと学習動機を打ち明ける大学教授もいる。政治家を目ざし、キケローのレトリックをじかに学びたいと真剣に訴える京大生も通ってくる。つまり、大人も子どもも無心になって学ぶ場がここにはある。

ところで、今ふれたリベラル・アーツに込められた本来の意味は何であったのか。この言葉は一般に「自由人に相応しい教養」と訳されるが、リベラルの語源に当たるラテン語の形容詞形はリーベリーである。日本語に直訳すれば「自由人」という意味になるが、この語は同時に「子ども」の意味をあわせ持つ。古代のローマ人は何にもとらわれない自由な心を子どもの姿に見出した。学問に志す者は、無垢な子どもの様にひたむきに勉学に勤しむべきなのである。そもそも、大学はなぜユニバーシティと呼ばれるのか。ユニとはラテン語で「一」のことであり、「学問の山頂」、すなわち唯一絶対の「真理」を象徴している。この山はどの入り口から頂上を目指してもよい。事実、大学にはたくさんの登り口(学部学科)が用意されている。しかし、ここが一番重要であるが、「人間はこの真理を手に入れることはできない」というのが古代ギリシア以来の約束事である。だからこそ、人は真理の探究に生涯をかけて情熱を燃やすことができるのである。

「自由人」は利を求めてこの「学びの山」に登ることをしないだろう。「真理」の探求に情熱を注ぐ者こそ「自由人」と呼ばれるに相応しい。私見を述べれば、息をひそめて昆虫を真剣に見つめる子どもの眼は、まさに「自由人」のそれである。日本の未来を考えると幼児教育の果たす役割は大きいと言われるが、その重要性を認識するには現場に立つにしくはない。私の目には、子どもたちの好奇心の輝きが、とりわけ「学びの山道」に登るエクセンプルム(手本)として、ひときわ大きく尊く見えるのである。

(やました たろう 学校法人北白川学園理事長、昭和60年文学部卒)

随想

今の日本人は「遣らずぶったくり」？

名誉教授 土岐 憲三

平成7(1995)年の阪神淡路大震災では、様々な災害と共に同時多発火災も発生したが、遠く離れた京都でも、仁和寺と醍醐寺の消防施設が機能を失った。一方、人口10万人当りの国宝や重要文化財の数は、京都は他の都市よりも



一桁大きい。さらに悪い事に、これからの3-40年間に近畿地方では、神戸のような内陸の地震の起きる可能性が極めて高いが、同時多発火災では消防自動車は期待できない。これらの事を考え合わせると、次なる地震が京都近辺を襲ったときには、多くの文化遺産が焼失することは火を見るよりも明らかであり、これが一種の恐怖観念となって、過去10年余りこの問題と取り組んできた。

ところが、これまでは文化財と防災はそれぞれが全く別の世界に属し、共通の場を持つ事は殆どなかった。個別の文化財を対象とした災害対策はあっても、文化財の密集する京都や奈良のようなところで、美術工芸品や建造物のみでなく、それらを擁する地域の景観をも含めた文化遺産、歴史遺産の災害対策が取り上げられる事はなかった。

国や自治体も、最近になって漸く、地震防災の問題が京都の文化遺産にとって重要な課題であることを認識し始めたところである。国連により、平成17(2005)年1月に神戸で開催された国際防災会議でも、世界遺産センターなどいくつかの国際機関の共同提案で文化財防災のセッションが持たれ、同じ年には内閣府も国としての重要性を認識する文書を公表した。また、平成18(2006)年には、清水寺と産寧坂などの地域を地震火災から守るプロジェクトの第一歩として、高台寺の近くに消防施設の構築が国と京都市の事業として始まっている。

京都の国宝や世界遺産の建造物は何度も火災を経験しており、中には清水寺のように10回近くも火災に遭ったところもあり、その都度当時の政治的権力者や宗教的権威によって復興が行われているのであ

る。このように、先人の努力によって多くの文化財が遺されてきたことで、日本人は子供の頃から文化遺産に接する機会があり、それらを通じて先人の精神的活動まで知ることが可能なのである。

その故に現在の日本人は自分たちが文化的に優れた人種であると思っているようだけれども、多くの文化財が遺されてきたのは、あくまでも先人のお陰なのである。戦乱や火災で失われたものを、造り直して今日まで遺してくれたのは、それが権力者であったとしても先人には変わりなく、現在の我々ではない。そして、現在は権力者は何処にも居ないのであるから、多数の文化遺産を大規模地震に伴う火災で焼亡してしまえば、特別なもの以外は復興は不可能である。

しかしながら、大地震に遭遇した時に多くのものを失う危険性は僅か100年ほど前に較べて急激に高まっている。すなわち、100年前には、西は千本通り、東は鴨川から祇園周辺、北は北大路通り、南は七条通りで囲まれる地域と飛び地である伏見だけに人々は集まって住んでいた。そして、国宝や世界遺産として現存する建造物は、この地域の外側にあり、いずれかの寺社が火災を起こしたとしても類焼する可能性は低かったのである。ところが今は、京都盆地の隅から隅まで人が住んでおり、神戸の地震のような同時多発火災が起これば、重要な歴史的建造物は次々と類焼、延焼するであろう。

今の日本人は同時代に生きているから、僅か100年前と較べての居住域の変化や、再建者が居なくなったという社会構造の変化に殆どの人が気付いていないのではないか。日本人のみならず人類共通の遺産としての文化財を、先人から貰っておきながら、それらを毀損することなく後世に伝える努力において欠けている部分があるのではないか。また、そのために必要な我慢をしたり、利便性の追求を控えたりしていないのではないか。この意味においては、現在の日本人は「遣らずぶったくりだった」と後世の人から軽蔑されても反論出来ないのではないだろうか。

(とき けんぞう) 元工学研究科教授 平成14年退官、専門は地震工学)

洛書

「評価」と陰徳

川端 祐司



大学が自らを省み、また社会への説明責任を果たすためにも「評価」活動が必要であり、また重要であることは言うまでもないでしょう。しかし、その意義は十分に認めているものの、自己評価・外部評価と続く評価活動のために、多種多様な資料を山のように作らされつづけると、いささか辟易してしまうのもしかたがないのではないかと感じてしまいます。

我々の研究所でも、外部評価活動が最終段階にあり、これまでも所内の活動をできるだけ正当に評価してもらえるように、さまざまな資料が作成されてきました。当然のことながら、評価は客観的に行うとするし、そうあらねばなりません。しかし、現実にはあまりに複雑で、研究評価だけでもそのパラメータの多さに啞然としてしまいます。それ以外の様々な活動についても評価するとなると、それはさらに非常に困難な作業となります。

もちろん、「できるだけ正しく伝える」よう努力し、完全ではなくても、よりましなものに仕上げる作業を続けて行くことになるのでしょう。しかし、どう考えても本質的に「評価」に乗らず、なんと「いとおしく」感じられる部分があるのです。

我々の所属する原子炉実験所は、全国共同利用研究所として、「原子炉による実験及びこれに関連する研究」を行うことを目的に設立されており、全国から集まる共同利用研究者に立派な研究成果を挙げて頂かなくてはなりません。そのためには、所内の研究者が高度な研究活動を行い、共同利用者にとって魅力ある研究の場で有り続けなければならないのは当然ですが、必要なことはそれだけではありません。

例えば、技術職員が安全・確実に研究用原子炉を運転・管理し、近隣住民が不安を感じることなく、またスケジュール通りに間違いなく実行することが、計画された多くの共同利用実験を遂行するのに

極めて重要です。また全国からの多くの共同利用者の受け入れを、様々なことが突発的に発生する中で確実に、また気持ちよく行われるためには、単に決められたことを「事務的」に進めるのではなく、臨機応変に対応してくれる事務職員が必要です。

これらの様な「普通の」仕事を高い水準で「普通に」やってのけるということは、単に決められたことを決められた通りに行うということではなく、僅かかもしれないがもう一歩進んだ努力をしているということでしょう。そして、それは(たぶん)当人は心のままにやっていることで、それをやったことを認めてもらおうというような考えはなく、ただ単に「当然だから」やっているに過ぎないのだと思います。

この心の有り様は、単なる「有能」という言葉が示すものではなく、また人柄の良さという言い方でもしっくりとは表せません。やはりここには「陰徳を積んでいる人たちがいる」と言いたくなります。

さて、「陰徳」ですが、大辞林(三省堂)によると「世間に知られないよいおこない。ひそかに行う善行。」とあります。「善行」というほど大げさなことでなくても、認められることを意識することなく他の人達のためにちょっとした行為を行う、といったことも含めて良いのではないのでしょうか。

「陰徳」。この忘れ去られた様な古い言葉に「成果」を支える重要なファクターが有るような気がします。研究者にとっても研究環境を整えるような事柄は直接評価項目に乗ることはほとんどないものの、それ無しではやがて活力が落ちていくことが目に見えています。切磋琢磨することは当然のことながら、影でもさりげなく支え合い「よりよく生きる」ことが「よりよい成果」となって行くでしょう。

「評価」が重要であるからこそ、その「評価」に乗り切らない「陰徳」を尊重する気持ちを忘れてはならないのではないのでしょうか。しかし、その陰徳をも評価してしまおうとは考えない方が良いのかもしれない。なにしろ「隠」徳なのですから。

(かわばた ゆうじ 原子炉実験所教授、専門は中性子物理学)

話題

経営協議会委員宇治キャンパスを視察

第12回経営協議会が2月2日(金)に生存圏研究所「木質ホール」で開催されたことに伴い、経営協議会委員による宇治キャンパス視察が実施された。化学研究所レーザー科学棟実験室, 防災研究所強震応答・耐震構造実験室および生存圏研究所エコ住宅を視察され、担当教員から各委員へ実験装置, 研究内容について説明があり、意見が交わされた。また、委員から宇治キャンパスの先進的研究の一端を知ることが出来たとの意見が出された。

(宇治地区事務部)



レーザー科学棟を視察する経営協議会委員

女子高生・車座フォーラム2007を開催

女性研究者支援センター主催「女子高生・車座フォーラム2007」が、2月3日(土)清風荘で開催された。研究者と直接に触れ合う機会を通して、研究者という仕事がどんなものか、研究者として生きることの楽しさや苦勞などについて女子高校生に知ってもらい、研究者の道を志す人が一人でも増えてほしいという願いのもとに企画された。参加女子高校生は30名の定員に達し、大学側からは12名の女性教員のほか、男性教員数名、院生、学生など27名が迎えた。はじめに、松本 紘研究担当理事・副学長の挨拶の後、第一部の全体会では、鈴木晶子教育学研究科教授による基調講演「女性と学問」があり、第二部では3つのグループに分かれて、様々なテーマについて討論し、最後に全体のまとめの会が行われた。散会後も、講師や院生・学生に積極的に話に行く女子高校生の姿がとても印象的であった。

女子高校生が学問や研究について、また女性が専門職に就くことについて大変高い意識と関心を持っていること、自分の将来についてしっかりした目的意識を持つと色々迷い、模索していることがよくわかり、今後、このような機会を増やしていきたいと考えている。



清風荘で開かれた初めての女子高生・車座フォーラム

(女性研究者支援センター)

教育学研究科附属臨床教育実践研究センター主催 第10回リカレント教育講座「『心の教育』を考える—子どもの育ちと身体—」を開催

臨床教育実践研究センターでは、年1回、教育相談活動に携わる専門家(幼・小・中・高校教諭、および学校教育、心理臨床従事者)を対象に、研修活動の一環として、リカレント教育講座を開催している。不登校、非行、ひきこもりなど、今現在の教育現場で大きな問題となっている現象を通じて、子どもの心や教育について深く考えることをねらいとしており、毎年、全国から熱心な教師や臨床心理士等専門家の参加を得ている。

第10回となる今年度は、「子どもの育ちと身体」を全体テーマとして、2月16日(金)、17日(土)の2日間の日程で開催し、92名の参加があった。第1日目は分科会に分かれて事例研究を行い、第2日目は「子どもの育ちと身体」をテーマに、センター設立10周年記念基調講演と心理臨床家、精神科医をお招きしての、シンポジウムを行った。

事例研究およびシンポジウムを通じて、幅広い視野から子どもたちの心のありようをとらえ、子どもたちとのかかわりについて理解を深める場となっ



メモを取りながら講演に聴き入る参加者

た。参加者からも、実践に基づいた内容から、学校現場での子どもの見方や、身体を通して表れる問題や課題への理解について多くの刺激を得ることができたとの感想が寄せられており、大変好評であった。来年度以降も引き続き開催していく予定である。

(大学院教育学研究科)

きさらぎコンサートを開催

医学部附属病院では、2月23日(金)、きさらぎコンサートを開催した。このコンサートは、入院中や外来を受診した患者さんに少しでも楽しんでもらえるよう、平成7年から始められたもので、医学部附属病院の毎年の風物となっている。

今年は、日吉ヶ丘ギターマンドリンアンサンブルのメンバーによる演奏と、相愛高校音楽科に勤務する國井美佐さん(ピアノ)、京都大学大学院農学研究科の中谷加奈さん(ヴァイオリン)による演奏があった。

マンドリンアンサンブルの演奏では、マンドリンやギターなどの楽器を紹介しながら、「サンタルチア」「時代」などを演奏した。「ディズニーメドレー」や「ラデツキ行進曲」では、会場からも手拍子が起こり、演奏者と観客が一体となって、楽しい雰囲気に包まれた。

また、國井さんと中谷さんらは、サン・サーンスの「ヴァイオリン協奏曲第三番 口短調」を演奏し、迫力あるヴァイオリンの演奏と、流れるようなピア



拍手が響いたマンドリンアンサンブル

ノの音色で、観客を魅了した。

吹き抜けのホールに設置された会場には約200人の患者さんらが集まり、こころ癒されるひとときとなった。

(医学部附属病院)

訃報

このたび、伊藤嘉彦^{いとうよしひこ}名誉教授、岡田清^{おかだ きよし}名誉教授、安田章^{やすだ あきら}名誉教授、兵藤知典^{ひょうどうともり}名誉教授、鎌田元一^{かまだ もとかず}文学研究科教授が逝去されました。

ここに謹んで哀悼の意を表します。

以下に各氏の略歴，業績等を紹介します。

伊藤 嘉彦 名誉教授



伊藤嘉彦先生は、平成18年12月23日逝去された。享年69。

先生は、昭和36年3月京都大学工学部を卒業，同41年3月同大学院工学研究科博士課程を修了し，同年4月に京都大学工学部助手，同助教を経て，同60年4月同大学工学部教授に就任された。平成13年停年により退官され，同年4月に京都大学名誉教授の称号を受けられた。その後，平成13年4月より同15年3月まで京都薬科大学客員教授，同年4月からは同志社大学客員教授を務められ，教育研究に尽力された。

先生は永きにわたり有機合成化学の第一人者として，幾多の革新的な新反応を開発してこられた。特に，黎明期にあった有機金属化学の重要性にいち早く着目され，典型金属元素と遷移金属元素を巧みに利用した様々な有機分子変換法を発見，発明し，今

日の有機金属化合物を用いる有機合成化学の隆盛に大きく寄与するとともに，世界における主導的研究者の一人として活躍された。中でも，イソニトリルの反応性開拓，有機ケイ素化合物の合成化学への利用，光学活性有機化合物の触媒的不斉合成法の開拓などは，先生の卓越した研究業績を代表する成果としてあげられる。これらの研究成果は380編を超える査読付欧文論文に発表され，昭和44年度日本化学会進歩賞，平成3年度日本化学会学会賞，平成18年度有機合成化学協会有機合成化学特別賞を受賞されるなど，高く評価された。

先生は飾らない人柄と，常に新しい化学現象を追い求める情熱をもって学生の指導にあたられ，産業界で活躍する多くの優秀な研究者を育て，日本の有機化学の発展に尽くされた。

(大学院工学研究科)

岡田 清 名誉教授



岡田清先生は，1月12日逝去された。享年84。

先生は，昭和20年京都帝国大学工学部土木工学科を卒業，同大学工学部助手，京都大学講師，助教授を経て昭和33年教授に就任，土木材料学講座を担当された。また，昭和57年から2年間，附属図書館商議員として，附属図書館の充実に尽力された。昭和61年停年により退官され，京都大学名誉教授の称号を受けられた。本学退官後は，昭和61年4月から平成9年3月まで福山大学工学部教授を務められた。

先生は土木材料，中でもコンクリートに関する研究において優れた研究業績を残され，その発展に寄

与された。特に，材料物性に関する研究，建設材料の開発と適用に関する研究，コンクリート構造工学に関する研究などを推進された。土木材料からコンクリート構造までの幅広い分野を視野に入れた，偏りのないものであった。主な著書に『コンクリートのクリープ』、『コンクリート工学ハンドブック』、『最新コンクリート工学』等がある。

また，土木学会，日本材料学会，日本コンクリート工学協会，プレストレストコンクリート技術協会などにおいて，会長，理事，支部長等の要職を歴任された。これら一連の教育研究活動，学界活動により，平成11年11月勲三等旭日章を受けられた。

(大学院工学研究科)

安田 章 名誉教授



安田 章先生は、1月24日逝去された。享年73。

先生は、昭和32年3月に京都大学文学部文学科(国語学国文学)を卒業し、同大学大学院文学研究科において国語

学国文学を専攻のあと、立命館大学講師、助教授、奈良女子大学助教授を経て、同46年4月京都大学文学部助教授に配置換え、同56年4月に教授に昇任、国語学国文学第二講座(現・国語学国文学講座)を担当し、多くの研究者を育てられた。平成8年停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。退官後は、平成8年4月から同17年3月まで甲子園大学人間文化学部教授を務められた。

国語学国文学研究室で多くの後継者を育てたのみならず、日本語学会(旧称・国語学会)の評議員、理事、表現学会の理事、そして新村出記念財団の監事

として、全国の研究者の研究環境の整備に貢献された。

先生の研究の中心は中世日本語であるが、特に、朝鮮資料と辞書の研究を中心としていた。朝鮮資料がまだ全く注目されていない時期であったが、大学院生の時から研究を始められ、朝鮮資料が日本語の歴史を研究する上で、非常に貴重な資料であることを実証された。また、中世には多種大量の辞書が編纂されたが、辞書の分析は極めて面倒な作業を必要とし、この分野も研究が進んでいなかった。先生はこの分野でも地味な研究を積み重ねられ、中世の知識の総体を明らかにし、辞書の研究が中世日本語だけではなく、中世文化にも大きな発言力があることを明らかにされた。朝鮮資料、辞書などを複製刊行し、学界全体が利用できるように尽力されたことも特筆すべき功績である。

(大学院文学研究科)

兵藤 知典 名誉教授



兵藤知典先生は、2月1日逝去された。享年84。

先生は、昭和22年京都帝国大学理学部を卒業され、立命館大学理工学部専任講師、同助教授、京都大学工学部助手、

同助教授を経て同41年同教授に就任、原子炉材料学講座を担当された。昭和61年停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。この間、昭和59年4月から同61年3月まで放射性同位元素総合センター長として、大学の管理運営に貢献された。退官後は平成2年3月まで岡山職業訓練短期大学校長を務められた。

先生は、放射線物理、とりわけ放射線遮蔽研究に

おける我国の草分けとして指導的な役割を果たされ、斯界の発展に尽力された。この業績に対して昭和55年米国原子力学会からフェローの称号が授与された。また、日本原子力学会理事、同関西支部長、日本原子力産業会議・関西原子力懇談会参与などの要職を歴任され、学会および産業界の発展に寄与された。さらに、原子力安全委員会・原子炉安全専門審査会審査委員として原子力行政にも貢献され、平成元年科学技術庁長官賞(原子力安全功労者表彰)を受賞された。主な著書に『放射線遮蔽入門』がある。

これらの功績により、平成10年11月勲三等旭日章を受けられた。

(大学院工学研究科)

鎌田 元一 文学研究科教授



鎌田元一先生は、2月2日逝去された。享年60。

先生は、昭和44年3月京都大学文学部を卒業後、同大学大学院文学研究科修士課程修了、同博士課程単位修得退学のものち、富山大学文理学部(のち人文学部)講師、助教授を経て、同58年4月京都大学文学部助教授に就任され、平成7年4月京都大学文学部教授に昇任、同8年4月京都大学大学院文学研究科教授に配置換えとなり、現在に至っていた。その間、本学埋蔵文化財研究センター長を務められた。

先生の専門は日本古代史で、文献を厳密かつ犀利に分析する実証的研究は、余人の追随を許さないものであった。史料が少ない古代史において、万人が共有しうる確実な史実を明らかにし、そこから歴史像を形づくるという姿勢を貫かれた。すなわち、部民制と屯倉制に関する正しい理解を示して倭王権に

よる全国支配システムを復原し、律令体制への道程を解き明かされた。また、国郡里制・籍帳制・課役制・班田制といった基幹的制度を正面から論じて、律令国家の特質を浮き彫りにされた。さらに続日本紀・四度公文・官印・木簡・漆紙文書など、古代史料の基礎的研究も幅広く手がけられた。これらの研究は大著『律令公民制の研究』(平成13年)に結実し、同書の学問的貢献が高く評価されて、平成14年には第24回角川源義賞を受賞された。近年は古代紀年論に取り組み、倭王権の歴史を通観する立脚点を築かれつつあった。

先生は長年にわたって、熱心に学生の教育と研究者の指導にあたられた。海外にも先生の薫陶を受けた古代史学者は多い。また、史学研究会理事長、木簡学会副会長などを歴任され、学会活動においても日本の歴史学を領導してこられた。

(大学院文学研究科)

お知らせ

原子炉実験所一般公開

原子炉実験所では、下記のとおり一般公開を実施しますので、多数のご来訪をお待ちしています。また関心をお持ちの方々へ、周知くださるようお願いいたします。

1. 日 時：4月7日(土) 10:00~16:00
2. 場 所：大阪府泉南郡熊取町朝代西二丁目 京都大学原子炉実験所
3. 内 容：ビデオ上映・科学実験体験コーナー
施設見学(原子炉棟、廃棄物処理棟)
4. 申込方法：個人：当日守衛所で受け付けます。(受付は15:30まで)
団体(10名以上)：団体名、責任者名、連絡先及び電話番号を記載した申込書(書式自由)に見学者名簿を添えて郵送、FAX等によりお申し込み下さい。
5. 問い合わせ先：〒590-0494 大阪府泉南郡熊取町朝代西二丁目
京都大学原子炉実験所総務課総務掛
TEL：072-451-2310 FAX：072-451-2600
詳細はホームページをご覧ください。
<http://www.rri.kyoto-u.ac.jp/kokai/ippan-k.htm>

隔地施設 紹介



理学研究科木曽生物学研究所

研究所の名前だけを聞いた人からは「基礎生物学研究所(愛知県岡崎市)」と間違えられることが多いが、長野県木曽福島町にある生物学の野外研究のための施設です。近くに木曽川・黒川・玉滝川などの河川、それに流入する溪流(特に研究所すぐ横の児野沢(ちごのさわ)), また周囲には木曽駒ヶ岳・御岳の山々、木曽駒高原・開田高原などの高原があります。内陸での動植物の野外研究の基地として優れた環境にあり、理学研究科の教員はもとより他の研究科(人間・環境学研究科や農学研究科など)、さらにこうした野外施設をもたない西日本の諸



木曽生物学研究所建物全景

大学(滋賀大学, 大阪府立大学など)の研究者・学生が研究と生物学実習・野外セミナーに利用しています。生物科学専攻の野外生物の研究施設としては、かつては瀬戸臨海実験所(現フィールド科学研究センター)と大津臨湖実験所(現生態学研究センター)がありましたが、これらの施設が理学研究科から離れた現在では唯一の野外研究施設であり、また理学研究科の諸研究施設のうち最も東にある研究所でもあります。研究所の目的および知名度の点で利用者の数はそれほど多くはなく、年間の延べ利用者数は40人~90人です。

この研究所を利用した本学の実習としては、理学部学生を対象とした「河川生物学実習」、総合人間学部学生を対象とした「生物学実習」、生態学研究センターによる全国の学生を対象とした公開実習(テーマは毎回異なる)などが開講されています。高校時代までに野生生物に触れる機会の少なくなった昨今の学生にとって、実物の野生生物を扱うこれらの実習から受ける啓発は予想以上に大きなものようで、こうした実習の経験がもとになって大学院等の進路や研究テーマを決めた学生も多く見受けられます。この研究所を利用しての研究としては、



研究所敷地内の溪流での実習風景

河川生物群集の食物網の研究, 亜高山帯林の研究, 行動観察による蝶類の研究, 水生昆虫の分類学的研究などが行われています。

この研究所の歴史は古く、大正15(1926)年、当時の動物学教室動物生理・生態学講座教授で日本の淡水生物の草分けでもある

木曽生物学研究所利用状況
(最近12年間)

年度	利用 件数	利用人数 (延べ)	う ち 外 部 の 利用 件数
6	3	24	
7	4	40	1
8	3	33	
9	5	45	
10	5	54	
11	5	40	1
12	6	46	
13	9	49	
14	4	40	
15	16	78	2
16	11	89	3
17	16	90	6



川村多実二(敬称略)たちによって溪流と森林の生物調査のための基地として計画され、当時の福島町から土地と建物の寄付を受け、昭和8(1933)年に開所しました(前ページ最上段左端の写真)。その後、隣接地の購入や改築を経て、また昭和63(1988)年には建物が全面改築され、現在に至っています。川村教授の後を継いだ宮地伝三郎(陸水生物学および湖沼学の草分け)を始め、上野益三(陸生生物学および生物地理学の泰斗)、今西錦司(水生昆虫・魚類による棲み分け論の提唱者)、可児藤吉(水生昆虫による河川生態学)、徳田御稔(哺乳類学および進化学)、森 圭一(水生動物の生理生態学)など、日本の陸水学を代表する研究者や、高橋健治(高山植物の生態学)、横内 斉(木曾御岳・乗鞍岳の植物生態学)らの植物生態学者も頻りに利用してきた研究施設です。そうした研究の中でも特に、この研究所の地の利を最大限に活用した可児の「溪流棲昆虫の生態」「木曾王滝川昆虫誌」は水生昆虫の研究としてだけでなく、河川の環境論としても優れたもので、この分野の古典となっています。可児は将来を嘱望されながらも若くして太平洋戦争の出征先で戦死しましたが、彼が昭和11(1936)年～同16(1941)年に木曾生物学研究所を好んで利用していたことは「可児藤吉全集」(思索社、1970)から読み取れます。

木曾生物学研究所の敷地は4,000平方メートルと広くはありませんが、森林と草地を抱く閑静な佇まいです。建物は160平方メートルの木造平屋の簡素な造りで、研究室2室と宿泊室2室の他に洗面所、浴室、調理室兼食堂、宿直室を備えています。宿泊可能人数は約15名です。野外研究の基地を主目的としているので研究室にはOHP等の視聴覚機器のほか、顕微鏡・実体顕微鏡程度しか備わっていませんが、その台数は十数名程度の実習には問題ありません。教職員は常駐していませんが、利用時には現地の管理人さん(現在は労務補佐員の山田真知子さん)が宿泊や食事のお世話をしています。山田さんの地元の食材を生かしたおいしい手料理には定評があります。



正面玄関での山田さん

[利用案内]

施設の管理・運営は理学研究科生物科学専攻の管理運営委員会が行っており、利用の申し込みは生物科学専攻事務室が受け付けています。利用資格は本学の教職員・学生および委員会が適当と認めた者で、後者については管理運営委員会が判断し、本学だけでなく学外の研究者の研究・実習にも利用されています。事務室の窓口に利用申込書を用意していますが郵送も可能なので、まずは電話でお問い合わせください。2週間前までの申し込みを原則としています。連絡先は以下の通りです。なお、利用には、宿泊費・食費・シーツと寝着着の洗濯代の負担を要しますが、実費なので高額ではありません。これは研究所の管理人さんにお支払いください。

連絡先：京都大学理学研究科生物科学専攻事務室

〒606-8502 京都市左京区北白川追分町

Tel. 075-753-4070, 4090 Fax. 075-753-4117

木曾生物学研究所の所在地と連絡先

〒397-0001 長野県木曾郡木曾町福島6388

Tel. 0264-22-2642

アクセス

- ・ J R 中央本線木曾福島駅から約1.2km (徒歩約15分、タクシーで約5分)
- ・ 中央自動車道の中津川インター(京都東インターから約190km, 約2時間30分)から国道19号線を北上して木曾福島町へ